

第34回 能楽若手研究会 大阪公演

13時始め (正午開場)

観世流 能

姥 梅若雄一郎
尉 山田 薫
住吉明神

高砂

從者 中村 宜成
阿蘇宮神主友成 福王 知登
從者 佐々木 秀

大鼓 山本 哲也
小鼓 成田 達志
太鼓 中田 一葉
笛 赤井 啓三

高砂の浦人 善竹 忠亮

田中 誠士 笠田 祐樹
稲本 幹汰 上野 雄介
上田 嶺貴 上野 朝彦
山本 麗晃 上田 宜照

後見

地謡

休憩二十分

大蔵流 狂言

鬼瓦

大名 小西 玲央
太郎冠者 善竹 隆司

後見 上吉川 徹



観世流 能

百萬の子 野端 春輝
狂女百萬 上田 顕崇

百萬

里人 喜多 雅人
祝迎堂門前の者 善竹 隆平

大鼓 山本 寿弥
小鼓 成田 奏
太鼓 横山 奈帆子
笛 貞光 智宣

田中 誠士 上野 朝彦
上田 嶺貴 長山 耕三
山本 麗晃 上田 貴弘
上野 雄介 上田 宜照

後見

地謡

附祝言

【十六時半頃 終了予定】

※各演目の公演時間は目安です。

観世流 能 「高砂」

九州阿蘇宮の神主友成は都へ登る途中、播州高砂の浦を訪れる。友成が里人を待っていると、松の木陰を掃き清める老夫婦が現れる。老夫婦は友成にここ高砂の松と遠く離れた住吉の松は「相生の松」と言われる由縁を教え、自分たち夫婦もこの松のように長く互いに心を通わせているのだと語る。また、古今和歌集の序を引用しつつ、万葉集の時代から松の葉の緑のように言の葉（言和歌）がさかんであることが太平の世のしるしであると賛美する。そして我々夫婦こそが高砂住吉の松の化身であることを明し、住吉での再会を約束して小船に乗って沖へと姿を消す。（中人）

友成一行も船であとを追いつき住吉に到着すると、住吉明神が現れ、力強く颯爽と舞を舞い、民の長寿と天下太平の世を祈り、祝福するのだった。

結婚式でのお祝いの謡「高砂やこの浦舟に帆をあげて」で古くから親しまれ、夫婦和合、はたまた世界の調和と人々の幸福を祈り祝う神の能「協能」の作品です。

祈る、祝う、という行為は人間が古くから持つことも原始的で強くポジティブなエネルギーの現れと言えます。そしてそれは人の心を描く能、さらにはあらゆる演劇にとって「芯」となる部分であると言えます。先の読めない目まぐるしく変化するこの時代に協能を演じる意味はなにか？ご覧になる皆様の心に何が残るか？そして能が大切にしてきた「芯」を模索しつつ、精進し勤めます。

文・山田 薫

大蔵流 狂言 「鬼瓦」

遠方の大名が裁判の為、長きにわたって京都へ単身赴任を続けていたがついに勝訴となった。これも日々信仰する因幡堂薬師如来のご加護のおかげと、お礼に五条の因幡堂を訪れる。故郷に帰ったら薬師如来を安置しようと考えた大名は、堂の外見造りを見学することにした。すると、瓦葺き屋根の棟端にあるものを見つけるが…。

遠くの故郷に残した家族を想う夫婦愛を描いた作品です。離れた月日が長くなると、どんな些細な記憶も愛おしく思えるのは今も昔も変わらない人間の素敵な感情ではないでしょうか。鑑賞する皆様が共感していただける様な人間味あふれる演技を精一杯努めます。

文・小西玲央

観世流 能 「百萬」

季節は春。ある男が拾った子供を連れて京都・嵯峨の大念仏（南無阿弥陀仏）を合唱する仏教のお祭りを訪れる。そこへ百萬という狂女が現れ、念仏の音頭を取って聴衆を盛り上げる。彼女は我が子と生き別れ、正気を保てなくなったことを語りつつ、子供との再会を釈迦仏に祈る。その様子を眺めていた子供は、百萬が自分の母親だと気づくも、同伴の男に自分の事を伝えないで色々尋ねるよう願う。子供の意向を汲んで男が百萬に話しかけると、彼女は、自分が子を探していると我が子の耳に届くよう、恥を偲んでこのようなことをしているのだと言う。仏の前で舞い謡えば、その心がきくと仏に届く、子供にも会えるに違いない、そう言われて今までの身の上を舞い語る百萬。哀れなその姿に男は心を動かされ、彼女に子供を引き逢わせる。百萬は喜び、仏に感謝し、子連れ立って帰って行くのだった。

何故、男の子は生き別れたのか、何故、母と分かってすぐに声をかけないのか、色々な想像の余地を残す能です。現代的な解釈なら母と子の確執や家出息子の話なのかもしれません。子を想う親の心を舞台に映せたらと思ひ、この曲を勤めます。

文・上田顕崇